

バスケットボール選手の心理的適性
——高校バスケットボール選手の TSMI の特徴について——

On the Psychological Aptitude of High School Basketball Players

吉沢 洋二*¹ 堀本 宏*² 新井 春生*³
猪俣 公宏*⁴ 岡沢 祥訓*⁵

Yoji YOSHIKAWA Hiroshi HORIMOTO Haruo ARAI
Kimihiko INOMATA Yoshinori OKAZAWA

Primarily, the purpose of the present study is to clarify the psychological aptitudes of high school basketball players from the viewpoint of sex differences, skill levels and differences between regular and non regular players by using TSMI. The subjects were selected from the participants of the Inter High School Competition (male: N = 72, female: N = 70) and the elimination of Aichi in Inter High School Competition (male: N = 83, female: N = 60).

As the results, the following tendencies were found out:

1. In the ANOVA (skill level × sex), the main effect for skill level was significant on TSMI-1 (F = 12.96 : P < .01), TSMI-2 (F = 7.01 : P < .01), TSMI-4 (F = 94.32 : P < .01), TSMI-7 (F = 7.66 : P < .01), TSMI-9 (F = 16.86 : P < .01), TSMI-11 (F = 17.39 : P < .01), TSMI-12 (F = 51.00 : P < .01), TSMI-13 (F = 47.23 : P < .01), TSMI-14 (F = 8.03 : P < 0.1), TSMI-15 (F = 12.73 : P < .01), TSMI-16 (F = 5.87 : P < 0.5) and TSMI-17 (F = 18.01 : P < .01), and the main effect for sex difference was significant on TSMI-6 (F = 8.48 : P < .01), TSMI-7 (F = 9.05 : P < .01), TSMI-8 (F = 7.67 : P < .01), TSMI-9 (F = 7.49 : P < .01), TSMI-10 (F = 7.07 : P < .01), TSMI-11 (F = 6.94 : P < .01) and TSMI-17 (F = 10.13 : P < .01), and the interaction between the two main effects was significant on TSMI-1 (F = 6.12 : P < 0.5) and TSMI-12 (F = 5.35 : P < .05).

2. In the ANOVA (competition record level × sex), the main effect for competition record was significant on TSMI-1 (F = 10.19 : P < .01), TSMI-2 (F = 5.90 : P < .05), TSMI-3 (F = 6.19 : P < .05), TSMI-9 (F = 19.39 : P < .01), TSMI-10 (F = 33.39 : P < .01), TSMI-13 (F = 9.79 : P < .01), TSMI-14 (F = 22.46 : P < .01), TSMI-15 (F = 19.42 : P < .01), TSMI-16 (F = 5.46 : P < .05) and TSMI-17 (F = 8.56 : P < .01), and the main effect for sex difference was significant on TSMI-1 (F = 3.98 : P < .05), TSMI-6 (F = 6.67 : P < .05) and TSMI-9 (F = 6.07 : P < .05), and the interaction between the two main effects was significant on TSMI-3 (F = 5.60 : P < .05).

3. In the ANOVA (regular and non regular players × sex), the main effect for regular and non regular players was significant on TSMI-6 (F = 13.70 : P < .01), TSMI-7 (F = 8.70 : P < .01), TSMI-8 (F = 8.71 : P < .01), TSMI-9 (F = 4.71 : P < .05) and TSMI-11 (F = 4.58 : P < .05), and the main effect for sex difference was significant on TSMI-1 (F = 4.55 : P < .05), TSMI-6 (F = 8.28 : P < .01), TSMI-9 (F = 5.83 : P < .05), TSMI-11 (F = 7.32 : P < .01), TSMI-13 (F = 5.38 : P < .05) and TSMI-17 (F = 10.04 : P < .01), and non significant interaction was detected on all subscales.

Viewing from the above results, it appears that high achievement motivation measured by TSMI is one of the very important psychological aptitudes for high school basketball players.

I. 緒 言

スポーツ選手の心理的適性については、すでに卓球選手を対象とした岡沢他(1983)の研究、ホ

ッケー選手を対象とした吉沢他(1983)の研究があり、松田他(1980, 1981)の作成した TSMI (Taikyō Sport Motivation Inventory) を手がかり

*¹名古屋経済大学 *²中京女子大学 *³市邨学園短期大学 *⁴名古屋大学 *⁵中京女子大学

*¹Nagoya Economics University *²Chukyo Women's University *³Ichimura Gakuen Junior College

*⁴Nagoya University *⁵Chukyo Women's University

として、これらの競技種目における競技力と競技意欲との関係を見出ししている。岡沢他(1983)の研究では、全日本レベルの者と全国高等学校総合体育大会(以後、インターハイとする)のレベルの者との比較によってTSMI-9「コーチ受容」の下位尺度を除く、16の下位尺度で競技レベルの差が現われている。他方、吉沢他(1983)の研究では、TSMI-4「勝利志向性」、TSMI-10「対コーチ不適応」、TSMI-11「闘志」、TSMI-13「不節制」の下位尺度で競技レベルの差を見出ししている。これらの研究によって、競技レベルの観点から心理的適性の違いが明らかにされている。しかし、この適性の問題は、スポーツ種目の特質に深い関連を持っていると考えられる。従って本研究では、岡沢他(1983)や吉沢他(1983)の研究で取り上げられている競技レベル別の心理的適性の問題について、さらに一つの大会における競技成績やスターティングメンバーと控えのメンバーなどの観点を加えることによって、前述した両者の研究結果を追試することを第一の目的とした。さらに、上記の研究のスポーツ種目とは異なるバスケットボールの種目を取り上げることによって、スポーツ種目の特質と心理的適性の問題についての手がかりを得ることを第二の目的とした。

II. 方法

①調査対象

〈high level グループ〉

男子については、昭和58年全国高等学校選抜バスケットボール選手権大会(以後、選抜大会とする)でベスト8に入り、同年に開催されたインターハイに出場が決定した8チームに調査を依頼した。しかし、8チームの内で2チームについては回収できなかった。そのために、選抜大会でベスト14に入り、インターハイに出場が決定した1チームを新たに加え、調査を依頼したチーム数は9チームであった。また、女子については、選抜大会でベスト8に入ったチームを対象として予定していたが、この内2チームがインターハイに出場できなかった。そのために、選抜大会には出場していないが、全国中学生大会で優勝した時の

主力メンバーを有して、インターハイに出場の決定した1チームを加え、調査を依頼したチーム数は9チームであった。

〈average level グループ〉

昭和58年インターハイ愛知県予選出場チームの内、男女8チーム、計16チームに調査を依頼した。average level グループの競技レベルとしては、愛知県予選の地区大会出場チームが、男子7チーム、女子5チームで、県大会出場チームが、男子1チーム、女子3チームであった。

②調査内容

松田他(1980, 1981)によって作成されたスポーツ選手の競技意欲を調査する質問紙、TSMIを使用した。

③調査時期及び回収率

昭和58年6月中旬から7月上旬にかけて、郵送法により依頼した。回収できたチーム数及び人数は、high level グループ男子7チーム(84名)、女子7チーム(82名)、average level グループ男子8チーム(96名)、女子8チーム(96名)、計30チーム(358名)で、回収率87.7%であった。この内、回答に不備なものを除いたhigh level グループ男子6チーム(72名)、女子6チーム(70名)、average level グループ男子8チーム(83名)、女子8チーム(60名)、計28チーム(285名)を処理の対象とした。有効回答率は74.2%であった。

III. 結果及び考察

1. 競技レベルの比較

high level グループとaverage level グループの両レベルの心理的適性を比較するために競技レベルと性差との2要因分散分析を行った。表-1は、平均と標準偏差を示し、表-2は、分散分析の結果を示してある。また、図-1と図-2は、性別ごとにプロフィール化したものである。

分散分析の結果、競技レベルの主効果が有意であったのは、TSMI-1「目標への挑戦」 $F=12.96: P<.01$, TSMI-2「技術向上意欲」 $F=7.01: P<.01$, TSMI-4「勝利志向性」 $F=94.32: P<.01$, TSMI-7「冷静な判断(情緒安定性)」 $F=7.66: P$

Table 1. Means and Standard Deviations for each subscales of TSMI in regard to sex and skill levels.

		male (N = 155)		female (N = 130)	
		high level (N=72)	average level (N=83)	high level (N=70)	average level (N=60)
TS-1	\bar{X}	21.2	20.7	22.5	19.8
	SD	3.4	3.8	4.2	3.4
TS-2	\bar{X}	23.3	22.8	23.6	21.8
	SD	3.0	3.9	4.1	3.4
TS-3	\bar{X}	22.6	22.3	22.7	21.5
	SD	3.3	3.8	4.7	3.2
TS-4	\bar{X}	23.3	18.9	24.2	19.3
	SD	4.3	4.1	3.6	4.0
TS-5	\bar{X}	19.8	20.2	20.6	21.0
	SD	4.7	4.9	4.8	4.6
TS-6	\bar{X}	19.1	20.2	21.0	21.2
	SD	4.2	4.6	4.0	3.7
TS-7	\bar{X}	19.0	18.1	18.0	16.6
	SD	3.0	3.8	3.7	3.3
TS-8	\bar{X}	20.1	19.7	19.0	18.5
	SD	3.1	3.7	3.8	3.2
TS-9	\bar{X}	23.7	22.0	25.0	23.1
	SD	3.0	3.9	4.0	3.7
TS-10	\bar{X}	17.5	18.0	16.5	16.2
	SD	3.6	4.5	4.8	4.7
TS-11	\bar{X}	26.7	24.4	25.1	23.6
	SD	3.0	4.3	3.9	3.9
TS-12	\bar{X}	23.7	21.3	24.6	19.9
	SD	3.8	4.9	3.7	4.0
TS-13	\bar{X}	18.3	20.2	17.2	20.3
	SD	3.3	2.9	3.0	3.0
TS-14	\bar{X}	19.1	18.1	18.9	17.6
	SD	3.3	3.5	3.3	3.5
TS-15	\bar{X}	23.5	22.0	24.0	22.4
	SD	3.5	3.4	4.0	3.7
TS-16	\bar{X}	18.6	18.4	18.7	17.0
	SD	3.3	3.4	3.3	3.1
TS-17	\bar{X}	25.3	24.1	26.9	24.9
	SD	3.2	3.0	3.0	3.5

Table 2. Summary of Analysis of Variance (sex × skill levels) for TSMI.

	sex	skills	interaction
TS-1	F= 0.20	** F=12.96	* F=6.12
TS-2	F= 0.65	** F= 7.01	F=2.24
TS-3	F= 0.59	F= 2.72	F=0.98
TS-4	F= 1.84	** F=94.32	F=0.27
TS-5	F= 1.98	F= 0.50	F=0.00
TS-6	** F= 8.48	F= 1.70	F=0.82
TS-7	** F= 9.05	** F= 7.66	F=0.36
TS-8	** F= 7.67	F= 1.17	F=0.01
TS-9	** F= 7.49	** F=16.86	F=0.05
TS-10	** F= 7.07	F= 0.04	F=0.58
TS-11	** F= 6.94	** F=17.39	F=0.77
TS-12	F= 0.25	** F=51.00	* F=5.35
TS-13	F= 1.89	** F=47.23	F=2.72
TS-14	F= 0.74	** F= 8.03	F=0.14
TS-15	F= 1.07	** F=12.73	F=0.01
TS-16	F= 2.75	* F= 5.87	F=3.66
TS-17	** F=10.13	** F=18.01	F=1.13

** P < .01 * P < .05

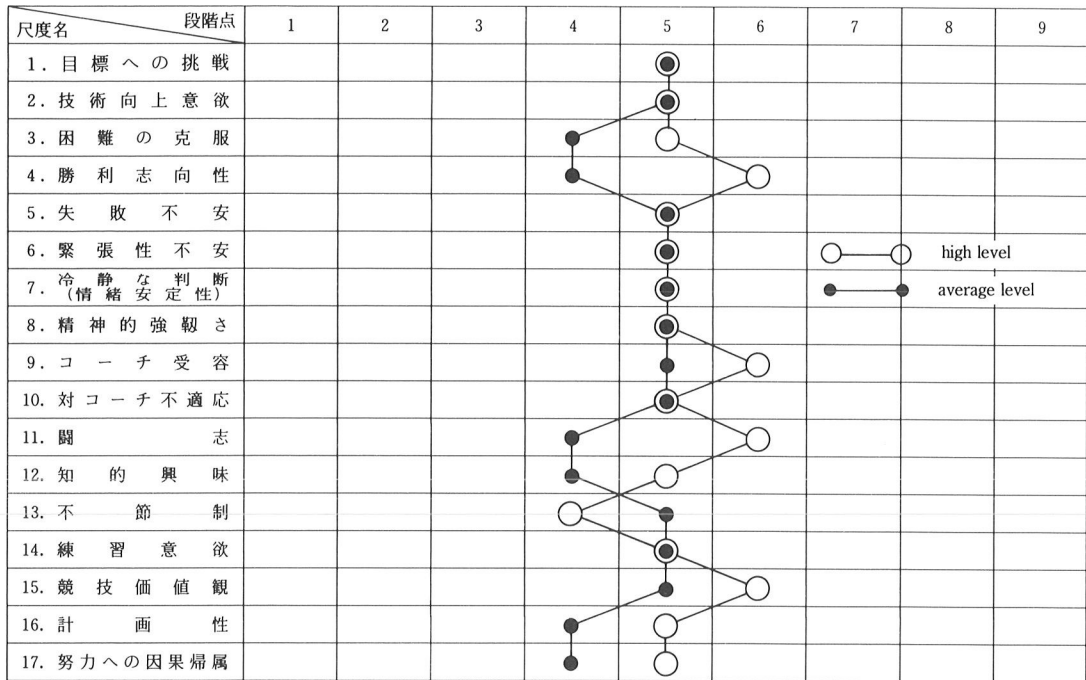


Figure 1. Mean profiles of TSMI for the male high and average skill level groups.

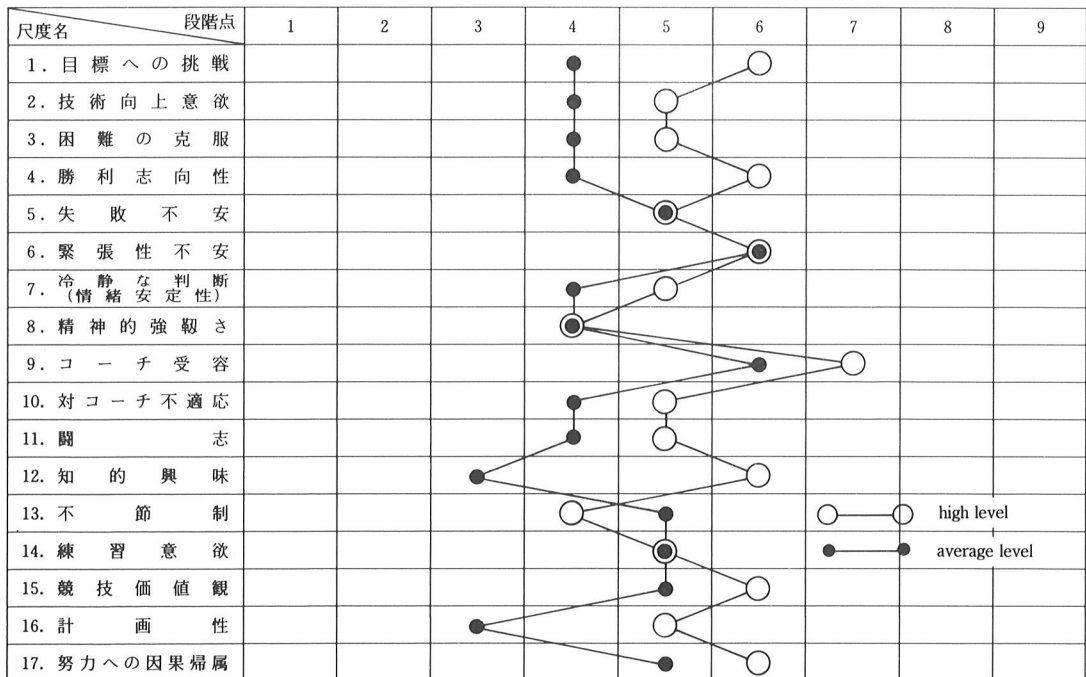


Figure 2. Mean profiles of TSMI for the female high and average skill level groups.

<.01, TSMI-9「コーチ受容」 $F=16.86$: $P<.01$, TSMI-11「闘志」 $F=17.39$: $P<.01$, TSMI-12「知的興味」 $F=51.00$: $P<.01$, TSMI-13「不節制」 $F=47.23$: $P<.01$, TSMI-14「練習意欲」 $F=8.03$: $P<.01$, TSMI-15「競技価値観」 $F=12.73$: $P<.01$, TSMI-16「計画性」 $F=5.87$: $P<.05$, TSMI-17「努力への因果帰属」 $F=18.01$: $P<.01$ であった。

このような結果から、TSMI-3「困難の克服」、TSMI-5「失敗不安」、TSMI-6「緊張性不安」、TSMI-8「精神的強靱さ」、TSMI-10「対コーチ不適応」の5尺度を除いた12尺度で high level グループの選手が average level グループの選手に比較してすぐれた心理的適性を示しているといえよう。つまり、high level グループの選手は、average level グループの選手に比べて、競技においては勝つことに意義があると考え、コーチを信頼し日頃の練習をきちんと計画的に実行する傾向が見られる。また、自分の行っている競技は自分にとって価値があり、試合での成功は自分の努力の結果であると考え、競技に関する情報を積極的に取り入れ、自己の目標や限界に挑戦し、技術の向上を目指して練習を意欲的かつ持続的に行っていると考えられる。さらに、試合の競り合い場面などでは闘志が強く現われ、落ち着いて冷静な判断を下すことができる傾向を示している。

このような結果の中で、岡沢他(1983)や吉沢他(1983)の研究結果と異なる特徴的な点は、コーチとの人間関係に大きな重みがかかっていることである。岡沢他(1983)や吉沢他(1983)の研究では、TSMI-9「コーチ受容」で有意差は見られず、TSMI-10「対コーチ不適応」で有意差が見られたのに対して、本研究では、TSMI-9「コーチ受容」で有意差が見られ、TSMI-10「対コーチ不適応」では有意差が見られなかった。つまり、岡沢他(1983)の研究では、比較対象が全日本レベルの者とインターハイの出場者、吉沢他(1983)の研究では、全日本レベルの者と同年代(20歳前後)の一般レベルの者となっていて、年齢の異なる者の比較や一般成人相互間の比較を行っている。しかしながら本研究では、高校生での

high level グループと average level グループとの比較を行っており、岡沢他(1983)や吉沢他(1983)の研究と比べて対象者の年齢が低くなっている。このようなことから、高校生という発達段階では、コーチに対する人間関係が競技レベルの差を決めている重要な要因の一つであると思われる。

以上のように、競技レベル差について比較を行い high level グループと average level グループ間で心理的適性の違いを見出すことができたが、TSMIの各下位尺度点は、標準化された場合の基準集団と比較した場合には、ほとんどスタナイン得点の5段階であり平均的な値となっている(図-1, 図-2)。

さらに性差について見ると、次のような下位尺度で有意差が見られた。これらの尺度は、TSMI-6「緊張性不安」 $F=8.48$: $P<.01$, TSMI-7「冷静な判断(情緒安定性)」 $F=9.05$: $P<.01$, TSMI-8「精神的強靱さ」 $F=7.67$: $P<.01$, TSMI-9「コーチ受容」 $F=7.49$: $P<.01$, TSMI-10「対コーチ不適応」 $F=7.07$: $P<.01$, TSMI-11「 $F=6.94$: $P<.01$, TSMI-17「努力への因果帰属」 $F=10.13$: $P<.01$ であった。この有意差の見られた7尺度のうち、TSMI-9「コーチ受容」、TSMI-10「対コーチ不適応」、TSMI-17「努力への因果帰属」の3尺度では女子がすぐれているが、TSMI-6「緊張性不安」、TSMI-7「冷静な判断(情緒安定性)」、TSMI-8「精神的強靱さ」、TSMI-11「闘志」の4尺度では男子がすぐれている。このように、女子は男子に比べてコーチに対する信頼感や従順さが高く、コーチとの人間関係がうまくいっていて、試合での成功や技術の向上は努力の結果であると考えている傾向が強い。また、男子は女子に比べて試合の競り合い場面では闘志が強く現われ、緊張場面での不安は低く、冷静な判断を下すことができる傾向を示している。さらに、交互作用の見られた尺度についてみると、TSMI-1「目標への挑戦」とTSMI-12「知的興味」で、ともに女子の high level グループの者が最高得点を示し、女子の average level グループの者が最低得点を示している。これに対して、男

Table 3. Means and Standard Deviations for each subscales of TSMI in regard to sex and competition records.

		male (N=48)		female (N=46)	
		higher (N=24)	lower (N=24)	higher (N=22)	lower (N=24)
TS-1	\bar{X}	22.3	20.9	24.8	21.4
	SD	3.1	2.9	3.6	4.7
TS-2	\bar{X}	24.0	22.9	25.2	22.8
	SD	2.9	2.3	3.3	4.9
TS-3	\bar{X}	23.0	22.9	25.5	21.5
	SD	3.7	2.5	4.1	5.2
TS-4	\bar{X}	23.0	24.0	24.7	23.5
	SD	4.0	4.1	3.9	3.5
TS-5	\bar{X}	19.2	18.7	19.5	20.3
	SD	4.0	4.7	4.8	4.7
TS-6	\bar{X}	19.1	18.2	19.9	21.1
	SD	3.7	3.4	3.0	3.7
TS-7	\bar{X}	18.8	19.6	18.2	18.5
	SD	2.8	2.6	2.7	4.1
TS-8	\bar{X}	20.1	21.0	20.1	19.6
	SD	2.8	3.2	3.1	4.2
TS-9	\bar{X}	24.7	22.7	27.3	23.4
	SD	2.5	2.3	3.5	4.3
TS-10	\bar{X}	15.4	19.1	13.8	19.1
	SD	3.0	2.4	3.9	5.2
TS-11	\bar{X}	27.0	27.2	26.3	25.5
	SD	3.2	2.6	3.2	3.9
TS-12	\bar{X}	24.1	22.8	25.2	24.3
	SD	3.8	3.4	2.7	4.8
TS-13	\bar{X}	17.0	19.7	16.9	18.1
	SD	3.7	2.3	2.9	3.0
TS-14	\bar{X}	19.8	18.0	20.5	16.8
	SD	2.5	2.9	2.7	3.1
TS-15	\bar{X}	25.0	22.0	25.5	22.0
	SD	3.1	3.0	4.1	4.0
TS-16	\bar{X}	19.8	18.6	19.3	17.6
	SD	2.8	2.9	3.0	3.3
TS-17	\bar{X}	26.2	24.3	27.3	25.6
	SD	3.2	2.6	3.2	2.9

Table 4. Summary of Analysis of Variance (sex × competition records) for TSMI.

	sex	competition record	interaction
TS-1	* F=3.98	** F=10.19	F=1.77
TS-2	F=0.58	* F= 5.90	F=0.82
TS-3	F=0.45	* F= 6.19	* F=5.60
TS-4	F=0.56	F= 0.01	F=1.89
TS-5	F=1.02	F= 0.03	F=0.48
TS-6	* F=6.67	F= 0.05	F=2.14
TS-7	F=1.74	F= 0.73	F=0.15
TS-8	F=1.01	F= 0.09	F=1.01
TS-9	* F=6.07	** F=19.39	F=2.01
TS-10	F=1.06	** F=33.39	F=1.05
TS-11	F=3.18	F= 0.20	F=0.55
TS-12	F=2.79	F= 2.00	F=0.07
TS-13	F=1.86	** F= 9.79	F=1.45
TS-14	F=0.19	** F=22.46	F=2.68
TS-15	F=0.12	** F=19.42	F=0.11
TS-16	F=1.46	* F= 5.46	F=0.16
TS-17	F=3.80	** F= 8.56	F=0.03

** P < .01 * P < .05

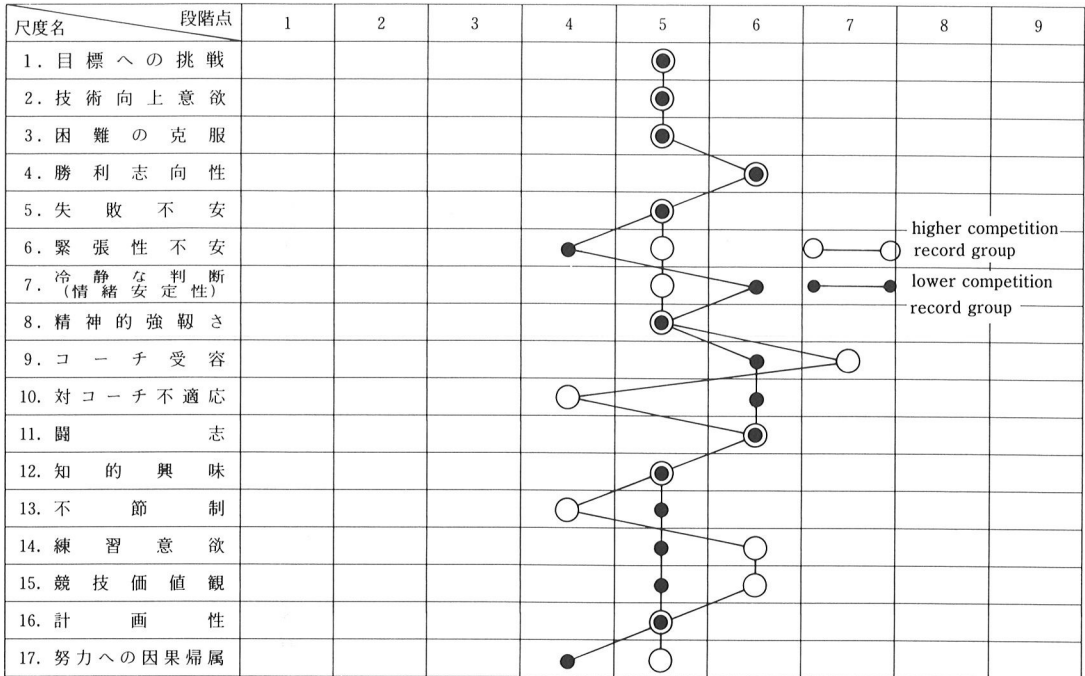


Figure 3. Mean profiles of TSMI for male higher and lower competition record groups.

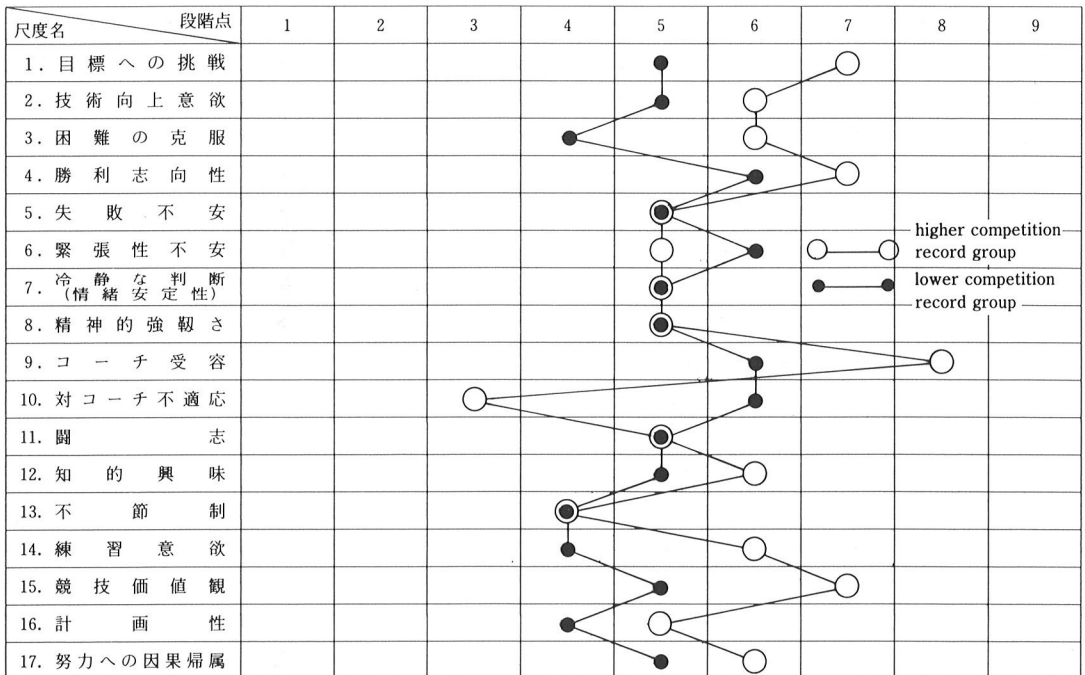


Figure 4. Mean profiles of TSMI for female higher and lower competition record groups.

子は high level グループの者と average level グループの者で大きな違いが見られない。従って、この2つの尺度については、特に女子で競技レベルとの関連が強く、重要な心理的適性になっているものと考えられる。

2. インターハイでの競技成績の比較

男子は、優勝チームと第3位のチームを上位グループとし、ベスト16のチーム2チームを下位グループとした。また女子は、優勝チームと第2位のチームを上位グループとし、ベスト32のチーム2チームを下位グループとした。この競技成績と性別とを2要因として分散分析をした。表-3は平均と標準偏差を示し、表-4は分散分析の結果を示してある。また図-3と図-4は、性別ごとにプロフィール化したものである。

分散分析の結果、競技成績の主効果が有意であったのは、TSMI-1「目標への挑戦」 $F=10.19: P<.01$, TSMI-2「技術向上意欲」 $F=5.90: P<.05$, TSMI-3「困難の克服」 $F=6.19: P<.05$, TSMI-9「コーチ受容」 $F=19.39: P<.01$, TSMI-10「対コーチ不適応」 $F=33.39: P<.01$, TSMI-13「不節制」 $F=9.79: P<.01$, TSMI-14「練習意欲」 $F=22.46: P<.01$, TSMI-15「競技価値観」 $F=19.42: P<.01$, TSMI-16「計画性」 $F=5.46: P<.05$, TSMI-17「努力への因果帰属」 $F=8.56: P<.01$ であった。

以上のように、競技達成動機、対コーチ関係、生活習慣、練習意欲、競技価値観、計画性、努力への帰属については、競技成績の高い者がすぐれた心理的適性を示している。つまり、目標への挑戦、技術向上意欲、困難の克服に高い欲求を持ち、コーチとの人間関係もうまくいっていて、自己の生活面でもきちんとし、競技の価値観は高く、努力し練習にも意欲を持って計画的に実行するといった傾向が強く見られる。反面、勝利志向、競技不安、自己統制能力、知的興味については、差が見られなかった。このことから、高校バスケットボール選手の心理的適性が、かなり競技成績に影響し、決定づける一要因となっていることが予想される。いわゆる、練習や試合での意欲、コーチ

との人間関係、日常生活ですぐれていることが、高い競技成績を残すための必要条件であると思われる。特に、コーチとの人間関係は、競技レベルにおいても有意差が見られたことから、高校生バスケットボール選手において、最も重要な心理的適性の一つであると考えられる。

これらの尺度得点について標準化の時の基準集団と比較した場合に、男子は上位グループ、下位グループともにほとんど中間である平均的値となっていて、スタナイン得点で両グループ間に違いが見られた場合であっても、1段階程度の差であった。しかしながら、女子では、下位グループがスタナイン得点でほぼ5段階に集中しているが、上位グループでは、競技達成動機、対コーチ関係、練習意欲、競技価値観などで下位グループよりも2段階も高くなっていった。このように、標準化された得点と比較した場合には、男子よりも女子、特に上位グループが平均的値より上回った高い値を示した結果であった(図-3, 図-4)。

さらに性差について見ると、有意差の見られた尺度は、TSMI-1「目標への挑戦」 $F=3.98: P<.05$, TSMI-6「緊張性不安」 $F=6.67: P<.05$, TSMI-9「コーチ受容」 $F=6.07: P<.05$ であった。また、交互作用の見られた尺度、TSMI-3「困難の克服」では、男子の上位グループと下位グループ間で差は見られないが、女子の上位グループと下位グループ間で著しく差が見られた。

以上、インターハイの競技成績について見てきたが、競技成績に対応して競技達成動機、コーチとの人間関係、日常の練習努力、練習意欲、生活態度などで差が見られ、高校バスケットボール選手の競技成績をある程度、規定する心理的適性であると考えられる。

3. スターティングメンバーと控えのメンバーとの比較

インターハイに出場した男女6チーム、計12チームの中でスターティングメンバーと控えのメンバーに分け、2要因分散分析を行った。表-5は、平均と標準偏差を示し、表-6は、分散分析の結果を示してある。また、図-5, 図-6は、性別ごと

Table 5. Means and Standard Deviations for each subscales of TSMI in regard to sex, and regular and non regular players.

		male (N=72)		female (N=70)	
		regular (N=30)	non regular (N=42)	regular (N=29)	non regular (N=41)
TS-1	\bar{X}	20.9	21.4	22.6	22.3
	SD	3.2	3.5	4.0	4.2
TS-2	\bar{X}	22.8	23.5	24.5	22.9
	SD	3.1	2.8	3.6	4.3
TS-3	\bar{X}	22.9	22.4	23.0	22.3
	SD	2.8	3.6	4.5	4.8
TS-4	\bar{X}	22.9	23.5	23.7	24.4
	SD	4.2	4.3	3.5	3.6
TS-5	\bar{X}	19.1	20.3	19.8	21.0
	SD	5.6	3.8	5.0	4.6
TS-6	\bar{X}	17.6	20.2	19.6	21.9
	SD	4.3	3.7	3.3	4.1
TS-7	\bar{X}	19.9	18.2	18.9	17.3
	SD	2.8	2.8	3.4	3.7
TS-8	\bar{X}	21.1	19.3	20.0	18.3
	SD	2.4	3.2	4.1	3.4
TS-9	\bar{X}	22.5	24.4	24.6	25.2
	SD	2.4	3.0	4.1	3.9
TS-10	\bar{X}	17.7	17.3	17.1	16.0
	SD	3.5	3.7	5.2	4.5
TS-11	\bar{X}	27.4	26.2	25.9	24.5
	SD	2.8	3.0	3.4	4.1
TS-12	\bar{X}	24.0	23.7	24.9	24.2
	SD	2.9	4.1	3.6	3.8
TS-13	\bar{X}	18.3	18.1	16.1	17.9
	SD	2.6	3.7	2.6	3.0
TS-14	\bar{X}	19.0	19.0	18.9	18.8
	SD	3.2	3.3	3.3	3.2
TS-15	\bar{X}	23.4	23.5	24.4	23.7
	SD	3.8	3.3	3.9	4.0
TS-16	\bar{X}	18.5	18.6	19.3	18.2
	SD	3.2	3.4	2.7	3.6
TS-17	\bar{X}	25.0	25.4	27.2	26.5
	SD	3.1	3.2	2.3	3.3

Table 6. Summary of Analysis of Variance (sex \times regular non regular players) for TSMI.

	sex	regular and non regular	interaction
TS-1	* F= 4.55	F= 0.02	F=0.38
TS-2	F= 0.78	F= 0.55	F=3.33
TS-3	F= 0.00	F= 0.78	F=0.01
TS-4	F= 1.64	F= 0.91	F=0.00
TS-5	F= 0.80	F= 2.15	F=0.00
TS-6	** F= 8.28	** F=13.70	F=0.07
TS-7	F= 3.02	** F= 8.70	F=0.00
TS-8	F= 3.54	** F= 8.71	F=0.01
TS-9	* F= 5.83	* F= 4.71	F=1.24
TS-10	F= 1.63	F= 1.08	F=0.20
TS-11	** F= 7.32	* F= 4.58	F=0.03
TS-12	F= 1.35	F= 0.49	F=0.08
TS-13	* F= 5.38	F= 2.22	F=3.49
TS-14	F= 0.12	F= 0.00	F=0.02
TS-15	F= 0.75	F= 0.24	F=0.48
TS-16	F= 0.13	F= 0.69	F=1.14
TS-17	** F=10.04	F= 0.02	F=1.14

** P < .01 * P < .05

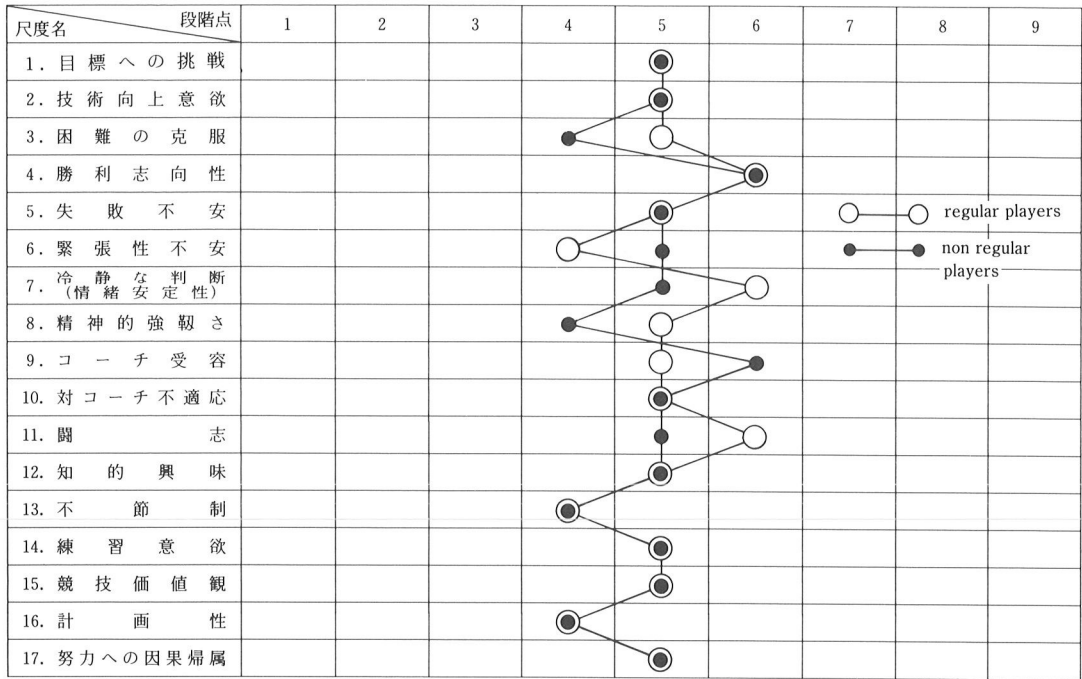


Figure 5. Mean profiles of TSMI for male regular and non regular players.

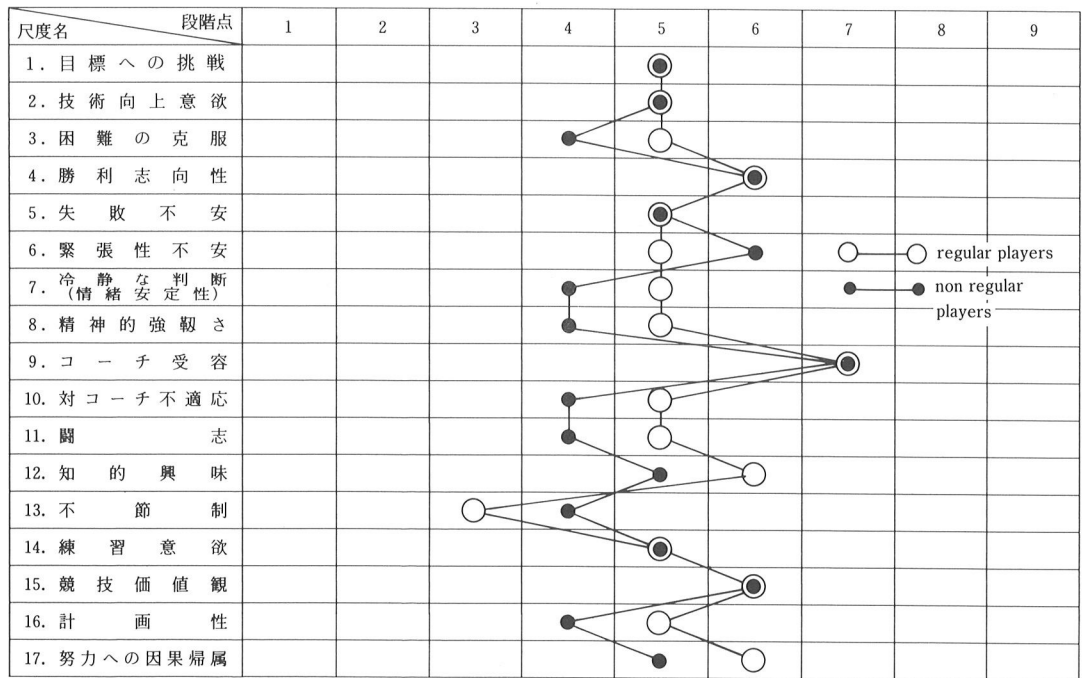


Figure 6. Mean profiles of TSMI for female regular and non regular players.

にプロフィール化したものである。

この分散分析の結果、スターティングメンバーと控えのメンバーの主効果が有意であったのは、TSMI-6「緊張性不安」 $F = 13.70: P < .01$, TSMI-7「冷静な判断 (情緒安定性)」 $F = 8.70: P < .01$, TSMI-8「精神的強靱さ」 $F = 8.71: P < .01$, TSMI-7「冷静な判断 (情緒安定性)」 $F = 8.70: P < .01$, TSMI-8「精神的強靱さ」 $F = 8.71: P < .01$, TSMI-9「コーチ受容」 $F = 4.71: P < .05$, TSMI-11「闘志」 $F = 4.58: P < .05$ であった。

以上の結果から、スターティングメンバーは、控えのメンバーに比べて緊張性不安が低く、自己統制能力にすぐれ、闘志が強い傾向を備えていると考えられる。しかしながら、コーチを受け入れる態度では、反対に低くなっている。

さらに性差について見ると、有意差の見られた下位尺度は、TSMI-1「目標への挑戦」 $F = 4.55: P < .05$, TSMI-6「緊張性不安」 $F = 8.28: P < .01$, TSMI-9「コーチ受容」 $F = 5.83: P < .05$, TSMI-11「闘志」 $F = 7.32: P < .01$, TSMI-13「不節制」 $F = 5.38: P < .05$, TSMI-17「努力への因果帰属」 $F = 10.04: P < .01$ であった。

以上、スターティングメンバーと控えのメンバーとの比較においては、スターティングメンバーの精神面の安定性が強調された結果となり、これは、スターティングメンバーと控えのメンバーとの心理的適性の特徴的な差であると思われる。

IV. ま と め

本研究の目的は、TSMIを手がかりとして性差、競技レベル、競技成績、スターティングメンバーと控えのメンバーという観点から、高校バスケットボール選手の心理的適性を明らかにすることである。被験者は、インターハイ出場者 (男子: $N = 72$, 女子: $N = 70$) とインターハイ愛知県予選出場者 (男子: $N = 83$, 女子: $N = 60$) の中から選ばれた。

結果として、次のような傾向が見られた:

1. 競技レベルについて

競技レベルの主効果が有意であったのは、

TSMI-1「目標への挑戦」 $F = 12.96: P < .01$, TSMI-2「技術向上意欲」 $F = 7.01: P < .01$, TSMI-4「勝利志向性」 $F = 94.32: P < .01$, TSMI-7「冷静な判断 (情緒安定性)」 $F = 7.66: P < .01$, TSMI-9「コーチ受容」 $F = 16.86: P < .01$, TSMI-11「闘志」 $F = 17.39: P < .01$, TSMI-12「知的興味」 $F = 51.00: P < .01$, TSMI-13「不節制」 $F = 47.23: P < .01$, TSMI-14「練習意欲」 $F = 8.03: P < .01$, TSMI-15「競技価値観」 $F = 12.73: P < .01$, TSMI-16「計画性」 $F = 5.87: P < .05$, TSMI-17「努力への因果帰属」 $F = 18.01: P < .01$ であった。また、性差の主効果が有意であったのは、TSMI-6「緊張性不安」 $F = 8.48: P < .01$, TSMI-7「冷静な判断 (情緒安定性)」 $F = 9.05: P < .01$, TSMI-8「精神的強靱さ」 $F = 7.67: P < .01$, TSMI-9「コーチ受容」 $F = 7.49: P < .01$, TSMI-10「対コーチ不適応」 $F = 7.07: P < .01$, TSMI-11「闘志」 $F = 6.94: P < .01$, TSMI-17「努力への因果帰属」 $F = 10.13: P < .01$ であった。さらに、交互作用の見られたのは、TSMI-1「目標への挑戦」 $F = 6.12: P < .05$, TSMI-12「知的興味」 $F = 5.35: P < .05$ であった。

2. 競技成績について

競技成績の主効果が有意であったのは、TSMI-1「目標への挑戦」 $F = 10.19: P < .01$, TSMI-2「技術向上意欲」 $F = 5.90: P < .05$, TSMI-3「困難の克服」 $F = 6.19: P < .05$, TSMI-9「コーチ受容」 $F = 19.39: P < .01$, TSMI-10「対コーチ不適応」 $F = 33.39: P < .01$, TSMI-13「不節制」 $F = 9.79: P < .01$, TSMI-14「練習意欲」 $F = 22.46: P < .01$, TSMI-15「競技価値観」 $F = 19.42: P < .01$, TSMI-16「計画性」 $F = 5.46: P < .05$, TSMI-17「努力への因果帰属」 $F = 8.56: P < .01$ であった。また、交互作用の見られたのは、TSMI-3「困難の克服」 $F = 5.60: P < .05$ であった。

3. スターティングメンバーと控えのメンバーとの比較について

スターティングメンバーと控えのメンバーの主効果が有意であったのは、TSMI-6「緊張性不安」 $F = 13.70: P < .01$, TSMI-7「冷静な判断 (情緒安定性)」 $F = 8.70: P < .01$, TSMI-8「精神的強靱

さ」 $F=8.71$: $P<.01$, TSMI-9「コーチ受容」 $F=4.71$: $P<.05$, TSMI-11「闘志」 $F=4.58$: $P<.05$ であった。

以上のような結果から、性差、競技レベル、競技成績、スターティングメンバーと控えのメンバーの観点から見ると、競技意欲は、高校バスケットボール選手の非常に重要な心理的適性であると考えられる。

文 献

- 1) 松田岩男他：スポーツ選手の心理的適性に関する研究——第1報，第2報——昭和55年度日本体育協会スポーツ科学研究報告，1980.
- 2) 松田岩男他：スポーツ選手の心理的適性に関する研究——第3報——昭和56年度日本体育協会スポーツ科学研究報告，1981.
- 3) 岡沢他：トップレベルの卓球選手の心理的適性に関する研究，総合保健体育科学，6. 1, 81-89, 1983.
- 4) 吉沢他：ホッケーの女子トッププレイヤーの心理的適性について，総合保健体育科学，6. 1, 113-121.

(昭和59年1月22日受付)